

上方絵と山口重春

越中 勇

上方絵について、天保9年(1838)初代長谷川貞信の作品を知人から贈られた曲亭馬琴は其の礼状の中に「上方版の役者見立八犬伝の錦絵四枚つづきを御恵与下さり、有難う存じます。仰せの通り、今では京、大阪ともにこういうものも巧みになり、ほとんど江戸絵と見まがいます。(中断)ところで、錦画や本類の彩色に金を用いますことは、上方ではおかまいなしですが、江戸は寛政年中からきびしい禁制がしかれています」(松平進氏意識)

また江戸の浮世絵師溪斎英泉著『無名絵随筆』の天保4年(1833)記名の序「吾妻錦絵之考」には

「錦絵の精巧さは、天明・寛政頃までは、京・大阪ではおろそかなものだったが、今は江戸より勝れて佳作品が多くなつた」(松平進氏意識)とある。

事実、文政・天保期(1820〜30年代)制作の上方絵を見ると、豪華な色彩と入念な彫り摺りの作品に驚かされる。長崎出身の上方絵浮世絵師山口重春(1802〜1852)が活躍した時期に此のように、当時評価されていた上方絵が、今日なぜに忘れ去られてしまったのだろうか、上方絵研究の第一人者松平進氏は自著『上方浮世絵の再発見』で嘆息されている。今日、一般的に浮世絵といえ、写楽、北斎、広重など馴染み深い絵師が多くなる江戸絵を指すのが常識となっており、毎年どこかで展覧会が開催されているのに比して上方絵の知名度が低いのは事実である。



山口重春「市川白猿(碁盤忠信)」
このように国内ではマイナーイメージの上方絵ではあるが、海外では「Osaka Prints」と呼ばれ、人気の浮世絵である

重春が活躍したのは「第2期・隆盛期」「第3期・爛熟期」であった。職業絵師が早くより存在していた江戸と異なり、大阪では、はじめは歌舞伎の鼻唄筋で絵心のある人物が役者絵を手がけていたようであるが、役者絵版行が商業的に軌道に乗り安定したことを背景に職業絵師が本業とした版画が誕生している。その第一号が重春だとされている。この時期は絵の具にベロ藍が多用され、色彩が飛躍的に豊かになり、また背景を細かく描き、躍動感あふれる舞台面を創出し、芸術的にも一つの頂点を極めている。

上方絵には江戸絵と異なつた特色がいくつか見られるが、其の一つに、天保の改革で中断された後にあらわれる「上摺」と「並摺」である。「上摺」は色板や模様様の板数が多く、金色など豪華な絵の具を使用し、「並摺」は板数が少なく、絵の具も安価なのが使用されている。これは初刷りと後刷りの関係ではなく、ほぼ全ての作品に、版行当初から上摺と並摺が用意されていたと思われる。そこには幅広い購買層へ対応した商業都市大阪ならではのあり様を垣間見ることができ、「浮世絵版画」と考えられて面白い。

近年、海外へ大量に旅立つた浮世絵の所蔵調査が進み、次第に世界的規模での所蔵状況が明らかになりつつあり、国内外を問わずネットでの情報公開も積極的になっている。大量の浮世絵を所蔵していることで知られるボストン美術館で、2006年北川博子氏が約2400点の上方絵を調査され、『ボストン美術館所蔵上方絵目録』(なにわ・大阪文化遺産学研究所センター2006)にその全容が報告されている。

北川氏は「この美術館所蔵の版画は全てが保存状態が良好で、特に中判作品には目を見張るものが多い」と述べられている。同館所蔵の山口重春の作品も初版の文政4年(1821)頃の「近江源氏先陣館」(大判絵)、高綱、盛綱、三浦之助(嵐橋三郎)、他、役者絵、ねりもの、美人画など25点がみられる。

現状では、江戸浮世絵と違い、上方絵の展示となると入場者数がやや少なく難しい展覧会ではあるが、長崎出身で上方絵の代表的絵師の一人であった山口重春の事績を顕彰する意味でも、ボストン美術館所蔵の上方絵を中心に、何時か上方浮世絵展が長崎と大阪で開催される事を願っている。

風信

○五月十一日は本会創立三十二年の記念日であり、当日は事務所で簡単な記念

り、研究者や愛好者も多く、展覧会図録や専門書も多く出版されている分野であることを、上方絵研究者北川博子氏が『なにわ・大阪文化遺産学叢書1 関西大学図書館所蔵上方役者絵画帖』・大阪における役者絵の歴史と所収上方役者絵について」の項で述べられている。

上方絵もそのうち、「伊藤若冲」ではないが、国内でも「オオバケ」するかもしれない。

上方で一本摺の浮世絵が継続的に出されるようになったのは、元禄期(1688)より一枚絵が版行されていた江戸とは異なり、100年程遅れて寛政期(1789)に入ってからのもので、今一つは浮世絵全体の中で、役者絵や美人画、風景画と均衡を保って版行されていた江戸と異なり、上方では役者絵が圧倒的に多く版行されていたからであろう。

また「上方絵」と一言でいっても、京都と大阪では文化的背景の相違から、版行の様相が異なつていたことが近年の研究成果によって明らかになってきている。京都は伝統を重んじ、絵画は肉筆によるものとする意識が強く、新興都市江戸で生まれた木版多色刷りの技法である錦絵には幾らか消極的であつたようである。

一方新しいものを積極的に取り入れようとする大阪では、江戸で生まれた人気錦絵の技法を用い、大阪人の嗜好に合致した独自の重厚でねばっこく・あけすけで写実的に描き・どこか滑稽味のただよう浮世絵を生みだしている。そして其の二翼をになうのが、どちらかといえば淡泊でゆつたりした長崎人気質をもつ長崎出身の重春であつたことがおもしろい。

大阪での浮世絵(役者絵)の歴史は一応5期に分けて考えられている。**〈第一期〉**創始期 寛政3年(1791)〜文化9年(1812)頃。**〈第二期〉**隆盛期 文化10年(1813)〜文政12年(1829)頃。**〈第三期〉**爛熟期 天保元年(1830)〜天保13年(1842)頃。**〈第四期〉**復興期 弘化4年(1847)〜安政2年(1855)頃。**〈第五期〉**退廃期 安政3

会を開催。十七日は「長崎県九條会幹事会」で「長崎と平和」につき懇談会開催。

○次に、六月一日と言えば長崎の人達は「小屋入り」と言う。「小屋入り」とは十月七・八・九日に開催される「長崎くんち」の「こと始め日」の意である。

○この日は今年の「踊町」に当る町の人達は、早朝より始まる笛と太鼓の「シャギリの町おこし」の音に眠りを覚され、夏の衣裳に衣がえ、町内ごとに列を組み諏訪・伊勢・八坂の三社を廻る。

○先月、五月十五日。今年の踊町八幡町より「八幡町踊奉納ニュース一号」が届いた。傘鉾・剣舞・弓矢八幡祝いの船の奉納。町内の参加一同百五十名。船の侍大将は城谷一心君七才(目下空手道場修行中の由)

○其の翌日、本年の踊町興善町奉納踊担当藤間峰織貴師匠来訪。本年も先代より引継の本踊牡丹唐獅子の舞を奉仕されるとの事。次いで長崎商工会議所より「本年のくんち奉納踊は前記二町の他、銀屋町の鯨太鼓、麴屋町の川船、西浜町の龍船、五島町の龍踊、万才町の本踊と以上合計七ヶ町の奉納踊がある由、連絡あり。

○六月の暦に十一日「五月雨」いり、十五日「父の日」、二十一日「夏至」とあつた。この頃より昔は「衣更」をしたそうである。

○旧記「長崎年中行事抄」をみると、六月は行事に伊勢宮あゆの神事、祇園まつり、長崎清水寺千日参り、諏訪社夏越さま茅輪くぐり、とあり「全て夏の災禍を防ぐ行事也」とある。

○国指定重要文化財として先月、長崎の聖福寺建造物四棟が一昨年の長崎清水寺本堂の国重要文化財指定に次いで唐様を取り入れた特色ある長崎ならではの建造物として国重文に認められた事は、長崎の新史跡名所観光地が一つ増えた事になる。

○長崎経済研究所発行「ながさき経済五月号」によると、生産面・公共工事共に増加傾向。造船は一定操業、観光宿泊は増加、雇用は改善傾向、然し水産は取扱金額ともに減少とあつた。

○今月ご寄贈いただいた書籍

- 一、久保美洋子女士より徳島市の歌人『三木計男作品集』を戴いた。歌集の中に「二十六聖人結城了悟神父」との交友関係短歌が多く詠載されていた事による。
- 一、長崎文献社より「松尾順造写真集」外山幹夫著「長崎史の実像」、後藤恵之輔著「新長崎ことはじめ」、『まちなかガイドブック』他
- 一、魚のまち長崎応援女子会より『Nagasaki魚のおもてなし』魚料理店案内(一五〇頁)
- 一、神戸市立博物館より『博物館だより』No.104・105』

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

